

平成 21 年 6 月 10 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2005～2008
 課題番号：17520201
 研究課題名（和文） 女性の主体構築の表象とイギリス・ルネサンス文化：
 社会的・歴史的意味とその変容
 研究課題名（英文） Representations of the Construction of Female Subjectivity
 in English Renaissance Culture: Cultural and Historical
 Significance, and Its Transformation
 研究代表者
 楠 明子（KUSUNOKI AKIKO）
 東京女子大学・文理学部・教授
 研究者番号：40104591

研究成果の概要：イギリスのルネサンス期（16～17世紀）社会において「自己」を認識し始めた女性たちがどのように「自己」を構築し表象しようとしたか、当時の文化一般では女性の自己認識がどのように表象されたのか、さらにそれらの「表象」がどのような変容を遂げていったかを探究し、その歴史的・社会的意味を考察した。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	1,100,000	0	1,100,000
2006年度	900,000	0	900,000
2007年度	800,000	240,000	1,040,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総計	3,600,000	480,000	4,080,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：イギリス・ルネサンス演劇；女性作家；シェイクスピア；メアリ・ロウス；エリザベス朝；英文学；フェミニズム；シドニー

1. 研究開始当初の背景

2005年度～2008年度に行なった本研究は、過去3期にわたる科学研究費補助金（1995年度～1997年度；1998年度～2000年度；2001年度～2004年度）を得て行なってきた研究を基盤としている。イギリス・ルネサンス期の演劇を中心とする文化における、女性の主体構築の表象とその変容の社会的および歴史的意味を探究し、この分野の研究を国内だけではなく国際的レベルで発展させるという目標が、本研究開始当初の背景にある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、女性が「自己」を認識し始めたイギリス・ルネサンス期において、いかに女性が「自己」を構築しようとしたか、当時の文化一般において女性の「自己認識」がいかに表象されているか、そしてその表象が時代と共にいかに変化を遂げているかの考察をまとめることにある。女性作家と男性作家の両視点を突き合わせながら、女性が「自己」を表現するために、同時代の文化のなかでいかなる「意味」を構築しようとしたか、それが時代の推移に伴いいかに変化していった

か、かつその文化的意味を、この4年間では特に女性と当時の政治との関係に焦点を当て、ポストモダン以降の文化批評を用いながら研究した。さらに日本の古代女流作家の作品、および歌舞伎における男性俳優による女性の主体構築の表象や、現代イギリスおよび現代日本における女性の「自己構築」の表象との比較も視野に入れながら、イギリス・ルネサンス期の文化における女性の「主体構築」の表象の政治的・社会的・歴史的意味とその変容を探究することを目的とした。

3. 研究の方法

上記の目的の研究を遂行するために下記の4方法を用いた。

(1) 英語による著書の草稿執筆

すでに Macmillan Palgrave (London) 出版社と正式に刊行を契約している単著: *Gender and Representations of the Construction of Female Subjectivity in English Renaissance Literature: Creating Their Own Meanings* (使用言語: 英語) の全六章のうち第一章 ('Women and Marriage'), 第三章 ('Women and Elizabeth I') の草稿を2008年度末までに執筆する。

(2) 上記著書執筆のための第一次資料のリサーチ。特に下記の2つの重要なリサーチを遂行

2005年~2008年の4年間、夏に1ヶ月間英国に滞在し、大英図書館 (The British Library) や貴族の館のアーカイブ等で第一次資料のリサーチを進める。特に Sidney 家のアーカイブが所蔵する Lady Mary Wroth のロマンス劇 *Love's Victory* の、世界で唯一完全な形で現存する手稿のリサーチをする (現当主 Lord De L'Isle の許可はすでに取得している)。

2008年3月のシカゴにおける The Renaissance Society of America の年次学会で口頭発表をする際、The Newberry Library (シカゴ在) に所蔵される世界で唯一現存する Lady Mary Wroth の *Urania Part II* の手稿 (初めて出版されたのは2001年) のリサーチをする。

(3) 国際学会での口頭発表の発表論文の執筆、およびセミナーの企画・実施

2005年4月、Cambridge 大学で開催される The Renaissance Society of America と The Society for Renaissance Studies,

United Kingdom の共催年次大会 (2005年4月7日~9日) で、Lady Mary Wroth の主体構築について Race の観点から論じた論文を口頭発表 (英語) するので、草稿を執筆。

2006年7月、オーストラリアの Brisbane で開催される第8回 World Shakespeare Congress (7月16日~21日) においてセミナー 'World Feminisms and Shakespearean Studies' の座長を Professor Kathleen McLuskie (英、U of Birmingham, The Shakespeare Institute (Stratford-upon-Avon) の Director)、Professor Carol Neely (米、U of Illinois) と共同で務めることがすでに決まっているので、世界中のシェイクスピア学者からセミナーメンバーを選抜し、発表論文の募集・審査など、具体的な準備をする。

2006年8月英国 Stratford-upon-Avon で開かれる第32回 The International Shakespeare Conference のセミナーで、イギリス・ルネサンス期の女性の主体構築の表象と当時の少年俳優が演じた女性の表象を比較する論文 (英語) を発表するので、草稿を執筆。

2007年7月、名古屋大学英文学会サマーセミナー公開講座において、Mary Wroth の主体構築の表象と Shakespeare の喜劇のヒロインの主体構築の比較についての論文の招待発表・講演をするので、草稿を執筆。

2008年4月に Chicago で開催される The Renaissance Society of America の2008年度年次学会で、Mary Wroth の女性の主体構築の表象と Shakespeare の戯曲における女性の主体構築との関係についての論文を口頭発表 (英語) するので、草稿を執筆。

2008年8月英国 Stratford-upon-Avon で開かれる第33回 The International Shakespeare Conference のセミナーで、Shakespeare の *King John* のなかの庶子の表象と Mary Wroth の *Urania* のなかの庶子の表象を比較し、女性の主体構築と「庶子」の母という立場の関係を探究する論文 (英語) を発表するので、草稿を執筆。

2009年3月、Los Angeles で開催される The Renaissance Society of America の2009年度年次学会における招待発表 (英語) で、イギリス・ルネサンス期における女性作家によるエリザベスI世の表象と当時の男性作家によるエリザベスI世の表象を比較し、その違いの社会的・文化的意味を探究する。本発表のための草稿を執筆。

(4) 国際的プロジェクトへの貢献

Shakespeare 研究の世界で最も権威のある年刊誌 *Shakespeare Survey* (Cambridge

UP)の編集委員を日本人で唯一人務めているので、世界中から投稿される論文を査読し(主に女性の主体に関わる論文の査読)かつイギリスにおける編集会議に出席し、本誌の編纂に関わることで、女性の主体構築の意味を世界的視野から考察する。本誌は査読が厳しいため、従来日本人研究者の論文が掲載されることはほとんどなかった。しかし、日本シェイクスピア協会会長職を務めている(2005年4月~2009年3月)ので日本人研究者の活動が把握できているため、優秀な日本人研究者に投稿を勧め、日本におけるシェイクスピア研究を世界に発信する役割を担う。

Professor Jonathan Bate (U of Warwick)とProfessor Eric Ramussen (U of Nevada) 編纂による Shakespeare の第一四折本を基にしたシェイクスピア全集、*The RSC William Shakespeare Complete Works* (London, Macmillan 刊)の編集顧問なので、Introduction に女性の主体についての観点が欠落していないか、また日本人研究者に使い勝手のよい版になるかを確認しながら、編纂の手助けをする。

国際シェイクスピア学会 (The International Shakespeare Association, 略称 ISA) の理事を務めると同時に、2011年7月 Prague で開催される第9回世界シェイクスピア学会大会の企画・大会委員を務めている。かつ、この世界学会のために、17世紀初期イギリスの女性作家の主体の認識と政治分野への関与を中心とする Panel を企画することを依頼されているので、ボヘミア(現在の Prague)においてボヘミア王妃となりプロテスタントとカソリックの宗教戦争である「30年戦争」に大きく関わることになるイギリス国王 James I の王女エリザベスと女性作家を中心とするパネルを企画する。17世紀イギリス女性作家研究の世界的な権威である Marion Wynne-Davies (英、U of Surrey)、Paul Salzman (豪、U of La Trobe)、Alison Findley (英、U of Lancaster) と私の4人がパネルのメンバーとなることが決定。このパネルで私はメアリ・ロウス著のロマンス *Urania* (1621) における女性の主体の表象の政治的意味についての論文(英語)を発表するので、英・豪の他の3人の研究者と緊密に連絡をとり合いながら準備を進める。

2008年夏より *The Cambridge World Shakespeare Encyclopedia* (Cambridge UP より 2012年刊行)の編者(5カ国を代表する6人のシェイクスピア学者の編者から成る)を務めており、イギリス・ルネサンス女性作家、女性の主体構築の項を担当するので、執筆を進める。したがって、本研究結果はこの Encyclopedia の編纂、執筆にも反映させ、世界に発信することができる。また、他の項

の執筆を日本のシェイクスピア学者に依頼する権限をもつので、日本のシェイクスピア研究を世界に披露する貴重な機会をもつことになる。

4. 研究成果

各年度の主な研究成果は以下である。

(1) 2005年度

4月初めにイギリスの Cambridge 大学で開かれた The Renaissance Society of America と The Society for Renaissance, United Kingdom の共催年次学会において、論文 'Gender and Representations of Miscegenation in English Renaissance Literature' を口頭発表した。この論文は改訂・加筆後、『東京女子大学英米文学評論』(2006年3月刊)に掲載された。

イギリスの Palgrave 社から刊行される拙著、*Gender and Representations of the Construction of Female Subjectivity in English Renaissance Literature: Creating Their Own Meanings* の第一章 'Women and Marriage' の執筆を進めた。8月にはイギリスに4週間滞在し、ロンドン大学やパーミンガム大学シェイクスピア研究所の専門家たちと意見交換をすると同時に、The British Library、シドニー家 (Penshurst Place) の Archives に所蔵されている第一次資料のサーチをし、当時の女性と男性の結婚観の違いの文化的・社会的意味について人種、階級、性差を中心に研究を進め、第一章草稿作成の基盤を作った。

2006年の Brisbane における第8回 World Shakespeare Congress のセミナーの企画を、共に座長を務める英米の他の2人の研究者と共に進めた。

(2) 2006年度

2006年7月16日~21日に Brisbane で開催された第8回 World Shakespeare Congress において、セミナー 'World Feminisms and Shakespeare' の座長を Professor Kathleen McLuskie (U of Birmingham, The Shakespeare Institute of the Director) と Professor Carol Thomas Neely (U of Illinois) と共に務め、セミナーを行なった。2年前よりテーマおよび、13名のメンバーを世界中の研究者から選抜し、セミナーの準備のプロセス等について他の英米2人の座長と頻りに電子メールで話し合い、このセミナーの具体的な企画を進展させていたおかげで、このセミナーは成功裡に遂行された。このセミナーで主に英米の、イギリス・ルネ

サンス期の女性を中心に多くの著書を刊行している研究者たちと意見交換の機会をもち、執筆中の著書の草稿作成に反映させることができたのは大きな稔りであった。

8月には Stratford-upon-Avon (英) で開催された第 32 回国際シェイクスピア学会に出席し、セミナーでシェイクスピア時代の少年俳優による女性の表象と女性作家による女性の表象を比較する論文を発表した。この論文は改訂・加筆をした後、『東京女子大学英米文学評論』(2007年3月刊)に掲載された。

同学会中、*Shakespeare Survey* の編集会議に出席し、担当の査読結果を報告し、日本人シェイクスピア学者による日本におけるシェイクスピア上演概観についての論文を次号に掲載することが決定した。

日本シェイクスピア協会会長として 2006 年 10 月から 2009 年 3 月末にかけて、協会創立 45 周年記念学会 (英 U of Birmingham, The Shakespeare Institute 所長の Professor Kathleen McLuskie を招聘) およびセミナーを開催したほか、記念論文集『シェイクスピアとその時代を読む』の企画を立て、総責任者を務めることで、本研究をさらに広い視野から考察する機会をもった。論文集は 2007 年 3 月末に研究社から刊行。

(3) 2007 年度

2007 年 4 月 15 日東京大学駒場キャンパス 18 号館ホールで開催された日本英文学会関東支部 4 月例会で、シンポジウム「英文学研究のディシプリンとは? 研究者となるためにすべきこと」の講師を務めた(司会・講師: 山内久明、講師: 楠明子、出淵敬子、草光俊雄、松田隆美)。この発表において、若手研究者には早いうちから世界における英文学研究を視野に入れながら研究を進め、国際学会や海外の専門誌で研究成果の論文を積極的に発表する態度を身につけることの重要性を強調した。

7 月に名古屋大学 2007 年度サマーセミナー公開講座において論文「Shakespeare 作品からみる Lady Mary Wroth - *Love's Victory* を中心に」を招待発表・講演した。この論文は大幅に加筆・改訂された後、名古屋大学英文学会『IVY』第 41 号(2008 年 11 月刊)に掲載された。

8 月には 1 ヶ月間イギリスに滞在し、大英図書館、シドニー家をはじめとする貴族の館に所蔵されている第一次資料をリサーチすると同時に、イギリス・ルネサンス期の女性を中心とする研究を行なっている英米の学者と意見交換の機会を設け、執筆中の著書の草稿作成に役立てた。

The RSC William Shakespeare: Complete Works の草稿を読み、編者 Jonathan Bate に日本人研究者から見た本書の問題点を指摘し、改訂してもらった。この『シェイクスピア全集』は 2007 年にイギリスの Palgrave Macmillan 社から刊行され、日本でも好評を得た。

(4) 2008 年度

2008 年 4 月には Chicago で開催された The Renaissance Society of America の年次大会で、Lady Mary Wroth の *Love's Victory* と Shakespeare の喜劇を比較する論文を口頭発表した。この論文は改訂・加筆された後、『東京女子大学英米文学評論』第 54 巻(2008 年 3 月刊)に掲載された。

Chicago を訪れたこの機会を利用し、Mary Wroth の口マンズ *Urania Part II* の現存する世界で唯一の手稿を所蔵する The Newberry Library に行き、Wroth 研究の世界の第一人者である Professor Margaret Hannay と共同リサーチを行なった。

8 月には Stratford-upon-Avon (英) で開催された第 33 回国際シェイクスピア学会のセミナー「Near Misses with History」で、シェイクスピア作 *King John* における庶子の表象と Mary Wroth 作 *Urania Part II* における庶子の表象を比較する論文を口頭発表した。この論文は改訂・加筆の後、『東京女子大学英米文学評論』第 55 巻(2009 年 3 月刊)に掲載された。また、この国際学会では、最終セッション「The Global Text」の司会を務めた。

上記国際会議後、Stratford で、2011 年に開催されるプラハコンgresについて国際会議に出席し、コンgresの運営、プログラムの検討、さまざまな企画の計画等を討論した。また *The Cambridge World Shakespeare Encyclopedia* の主編者 Professor Bruce Smith (U of Southern California) と本書の編纂について話し合った。

8 月は通算 1 ヶ月間イギリスに滞在し、大英図書館やシドニー家の Archives でリサーチを進めた。また、イギリス・ルネサンス期の女性について研究している英米の研究者と意見交換の機会を多く設けることができた。

2009 年 3 月には Los Angeles で開催された The Renaissance Society of America の 2009 年度年次学会で、Mary Wroth をはじめとするイギリス・ルネサンス期の女性作家が表象する Elizabeth I の表象の政治的意味について招待口頭発表を行なった。この発表は幸い好評を得て、イギリス・ルネサンス文化

に関わる世界的な権威をもつ年刊誌 *The Sidney Journal* に、本論文を改訂して寄稿するよう招きを受けた。

上記 8 件の国際学会での発表やリサーチを行ない、また 5 本の雑誌論文を完成させることを通し、執筆中の著書の一章、五章の草稿はほぼ出来上がった。さらに 4 件の国際的プロジェクトについてはすべて成功したか準備が順調に進んでおり、自分の研究を国際的視野から考察する機会を得、著書の草稿の執筆に大いに役立った。日本人の若手研究者に国際舞台で活躍する機会を設けることに役立てたことは、うれしい限りである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

楠明子、'Near Misses With History: Historiography and Representations of Bastardy in *King John* and Lady Mary Wroth's *Urania II*'、『東京女子大学英米文学評論』、査読無、第 55 巻、2009 年、1 - 15 ページ

楠明子、'Shakespeare 作品からみる Lady Mary Wroth - *Love's Victory* を中心に」、名古屋大学英文学会『IVY』、査読有、第 41 巻、2008 年、21 - 42 ページ

楠明子、'Love's Victory As A Response to Shakespeare: A Configuration of Gender Distinctions'、『東京女子大学英米文学評論』、査読無、第 54 巻、2008 年、1 - 18 ページ

楠明子、'Female Audience and Changing Conceptions of the Boy Heroine in Early Seventeenth-Century English Drama'、『東京女子大学英米文学評論』、査読無、第 53 巻、2007 年、61 - 74 ページ

楠明子、'Gender and Representations of Mixed-Race Relationships in English Renaissance Literature'、『東京女子大学英米文学評論』、査読無、第 52 巻、2006 年、21 - 35 ページ

[学会発表](計 8 件)

楠明子、'Lady Mary Wroth's Representations of Queen Elizabeth I in *Urania Part II*'、The Renaissance Society of America 2009 年次学会、2009 年 3 月 20 日、Los Angeles (米)

楠明子、'"Near Misses with History": Historiography and Representations of Bastardy in *King John* and Lady Mary

Wroth's *Urania II*'、The Thirty-Third International Shakespeare Conference、2008 年 8 月 5 日、The Shakespeare Institute、Stratford-upon-Avon (英)

楠明子、'Love's Victory as a Response to Shakespeare: A Configuration of Gender Distinctions'、The Renaissance Society of America 2008 年次学会、2008 年 4 月 2 日、Chicago (米)

楠明子、'Shakespeare 作品からみる Lady Mary Wroth - *Love's Victory* を中心に」、名古屋大学 2007 年度サマーセミナー、2007 年 7 月 20 日、名古屋大学(招待発表・講演)、名古屋

楠明子、山内久明(司会・講師)、出淵敬子、草光俊雄、松田隆美、'英文学研究のディシプリンとは? 研究者となるためにすべきこと'、日本英文学会関東支部 4 月例会、2007 年 4 月 15 日、東京大学(駒場)、東京

楠明子、'Female Audience and Changing Conceptions of the Boy Heroine in Early Seventeenth-Century English Drama'、The Thirty-Second International Shakespeare Conference、2006 年 8 月 8 日、The Shakespeare Institute、Stratford-upon-Avon (英)

楠明子、'World Feminisms and Shakespeare Studies'、The 8th World Shakespeare Congress、2006 年 7 月 17 日、Brisbane (豪)

楠明子、'Gender and Representations of Miscegenation in English Renaissance Literature'、The Renaissance Society of America and The Society for Renaissance Studies, United Kingdom 2005 年次学会、2005 年 4 月 8 日、University of Cambridge、Cambridge (英)

[図書](計 2 件)

楠明子、河合祥一郎、井出新、他、研究社『シェイクスピアとその時代を読む』(日本シェイクスピア協会編)、2007 年、248 ページ

楠明子、玉泉八州男、上野美子、他、研究社『新編シェイクスピア案内』(日本シェイクスピア協会編)、2007 年、234 ページ

6. 研究組織

(1) 研究代表者

楠明子 (KUSUNOKI AKIKO)
東京女子大学・文理学部・教授
研究者番号: 40104591

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし